

活動報告～動物班～（令和6～7年度）

調査の実施方法

- ◇場 所 五ヶ山ダム、市内河川、山田、安徳、梶原、後野、松木、今光、中原等
- ◇時 期 2024年8/22、11/19 2025年1/25、5/31、6/3、7/22、8/5、11/20 2026年2/7
- ◇方 法 目視（双眼鏡・望遠鏡含）、鳴き声、網（ガサガサ）、ライトトラップを用いた調査等



1.調査・活動結果



1) カワセミ

那珂川市の市鳥であり、鮮やかな瑠璃色の輝きから「空飛ぶ宝石」と称されます。全長 17cm ほどで、嘴が大きく、オスは上下の嘴が黒く、メスは下の嘴が赤いことで見分けられます。水中にダイビングして魚・エビなどを獲ります。五ヶ山周辺だけでなく、市内の河川や水路・池などでも広く観察されます。



2) カルガモ

日本では古くから「万葉集」にも詠まれ、那珂川市でも一年を通じて河川や水田で観察される馴染み深い留鳥（りゅうちょう）、雌雄はほぼ同色で、主に植物を食べています。初夏には親鳥の後を追って一列に泳ぐ雛の愛らしい姿が市民に親しまれており、那珂川の穏やかな水辺環境の豊かさを象徴する存在です。



3) アカハライモリ（絶滅危惧Ⅱ類 [VU]）

「井戸（または田んぼ）を守る」が名の由来とされる日本固有種です。腹部の鮮やかな赤色は捕食者への警告色ですが、失った体を再生する驚異的な能力でも知られます。市内の水田やビオトープなど、豊かな水辺環境で今もその姿を見ることができます。



4) ニホンアカガエル（絶滅危惧Ⅱ類 [VU]）

日本の固有種で、1月から産卵を始める「早春の使者」とも言えるカエルです。水路の整備や乾燥化など環境変化の影響を非常に強く受けやすい種ですが、市内では里山の湿地など、適切な環境が維持されている場所で継続的にその姿が観察されています。



5) トウヨシノボリ

吸盤状の腹鰭で川底の石や護岸に張り付く姿が特徴的な身近な川魚の代表格です。止水域や緩やかな流れを好み、ビオトープ内の流れ込みなどで観察されました。肉食性で水生昆虫などを捕食し、春から夏にかけては石の下に巣穴を作って繁殖する、那珂川の豊かな里山生態系を支える種の一つです。



6) ニホンカナヘビ

日当たりの良い林縁や草原を好み、素早く動き回って昆虫などを捕食する、里山環境を代表する爬虫類です。草むらや石垣などでその姿が観察されました。昆虫を捕食する一方で、鳥類やヘビ類の重要な餌資源にもなっており、複雑で豊かな生態系のピラミッドを支える基盤的な存在です。



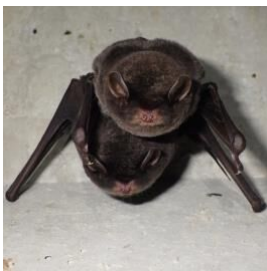
7) コオイムシ (準絶滅危惧 [NT])

メスがオスの背中に卵を産み付け、オスはその卵を保護して移動する「子負虫」の名の通りのユニークな習性を持つ水生昆虫です。かつては身近な存在でしたが、農薬の影響により激減しており、現在では豊かな水辺環境のバロメーターとなっています。



8) ゲンジボタル

清流域でカワニナを食べて育つ幼虫は、護岸が自然な状態で保たれた環境を必要とし、初夏の乱舞は地域の水辺環境が健全である何よりの証です。市内の良好な河川環境で繰り広げられる幻想的な光の通信は、未来へ守り伝えていくべき那珂川の貴重な里山生態系のバロメーターとなっています。



9) ユビナガコウモリ (準絶滅危惧 [NT])

昼間は洞窟などに潜み、日没後に河川や森林で数百匹ものユスリカやカなどの昆虫を捕食して飛び回る種類です。市内の特定の環境において数十匹が固まって暖を取る貴重な姿が観察されました。冬場、安定した温度・湿度が保たれる「ねぐら」を確保することが、彼らの越冬にとって極めて重要です。

2. 活動のまとめと今後の展望

令和6～7年度は、五ヶ山ダムエリアに整備された「倉谷第2ビオトープ」を中心に定着状況を多角的に検証した。両生類から猛禽類まで、多様な生物がこの環境を利用していることが確認できた。

今後は、倉谷第2ビオトープの調査を軸に、同日同時刻に市内各地でのホタル観測やライトトラップなどの調査も続けていきたい。

